平成 28 年度 舟木遺跡の発掘調査成果について
～ 淡路市国生み研究プロジェクト成果発表 ～

１.要　旨

平成２８年４月に認定を受けた日本遺産ストーリーのタイトルである『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」。その背景には古代国家形成期に重要な役割を果たした淡路島の歴史がありました。平成２７年度に着手した“淡路市国生み研究プロジェクト”は、古代国家形成の原点ともいえる弥生時代における島の歴史を、北淡路の丘陵部に急増する弥生時代後期の遺跡群の調査をとおして究明しようとするものです。その中心となるのが、舟木遺跡の重点調査です。

平成２７年度、中国鏡の発見につながった出土遺物の再整理に続き、本年度は遺跡発見の契機となった尾根を対象として発掘調査を行いました。その結果、限られた調査面積であったにも関わらず、五斗長垣内遺跡に続き、多数の鉄器が出土したほか、大型の工房建物の存在が明らかになるなど、弥生時代の鉄器文化を解明する上で極めて重要な遺跡である可能性が見えてきました。今回、その成果を発表いたします。

２.遺跡名

舟木遺跡（ふなきいせき）

３.時　代

弥生時代後期 ～ 終末期

４.調査主体

淡路市教育委員会

５.調査内容

・調査面積：１２８㎡（２×１０ｍ５箇所　２×７ｍ２箇所）
・調査期間：平成２８年１０月１１日 ～　平成２９年１月３１日（予定）

６.調査結果

(1) 検出遺構

・竪穴建物跡　４棟（後期後半～終末期、いずれも建替えあり）
　円形　３棟（№６、７、９トレンチ）
　隅丸方形　１棟（№２トレンチ）
・溝状遺構：１条（弥生時代終末期）

(2) 出土遺物

・鉄製品　　５７点
・石製工具　４２点（台石、叩石、磨石、砥石）
・弥生土器　３１箱　弥生時代後期後半～終末期
　（壺、甕、鉢、高坏、器台、製塩土器、イイダコ壺、小型土器）

７.評　価

今回の発掘調査では、昭和４１年に淡路考古学研究会顧問である岡本稔氏が遺跡を発見した丘陵を対象として、トレンチと呼ばれる幅２ｍの溝７本を発掘しました。長さ１０ｍのトレンチが５本、７ｍが２本の合計１２８㎡というごく狭小な調査面積であったにもかかわらず、竪穴建物跡４棟を検出し、多数の鉄器が出土するという大きな成果がありました。これは、舟木遺跡の通常ならざる姿を物語る成果であるともいえます。その成果についての要点は、以下のとおりです。

① 検出した建物跡は、直径が１０ｍを超える大規模な円形の建物（№６・７・９）や特殊な壁際土坑を有する隅丸方形の建物（№２）など、通常の住居とは異なる機能を持つ建物と想定できます。いずれの建物跡からも鉄器が出土する状況もそれを裏付けるものといえます。

②出土した鉄器の総数は５７点を数え、今回の調査面積が狭小であることを考えれば、その数は大規模な鉄器生産集落である五斗長垣内遺跡をしのぐ可能性があります。

③出土した鉄製品は、鉄器生産（鍛冶）に関連するものと工具類とに分けることができます。後者には針状鉄器など、小型の工具類が多く、検出した建物跡はそれらを使用した何らかの生産工房であることも予想できます。これらのことから、今回の調査範囲には、鉄器生産工房とその他の手工業生産工房からなる大規模な工房群が存在する可能性も想定できます。

④出土した土器からは、五斗長垣内遺跡が姿を消した以降も鉄器生産を行っていたことが確実となりました。それを裏付けることとなった№９トレンチの溝から出土した多数の鉄器と大量の土器群には祭祀的な様相も見ることができ、背後の丘陵頂上部に工房群と深く関係する重要な遺構が発見される可能性もあります。

⑤今回の調査範囲で検出した工房群のほかにも、谷部を取り巻く周囲の尾根上には当時の土地開発の痕跡や数多くの建物群が存在することが想定でき、それらが有機的な関係を持って広大な範囲に広がる、弥生時代の淡路島では他に例を見ない構造を有する遺跡であることが見え始めました。

８.まとめ

今回の舟木遺跡の発掘調査成果は、これまでの五斗長垣内遺跡の調査成果や今後も発見される可能性がある遺跡の存在などを考え合わせれば、弥生時代後期に急増する山間地集落群を有する淡路島北部が鉄器の製作や保有で近畿地方でも極めて重要な地域である可能性を想起させるものであります。今回の成果は、舟木遺跡はその中でも中心的な位置を占める可能性を示しています。

今回の調査は、ごく限られた範囲で成果であり、実態解明には今後の調査の積み重ねが必要ですが、今後も兵庫県教育委員会や兵庫県立考古博物館などとも連携を図りながら、舟木遺跡の実態解明と淡路島の弥生時代の歴史究明に努めていく予定です。

平成２８年度舟木遺跡発掘調査成果一覧表

地区名	遺構				遺物									
					鉄器					石器				
	種別	数	形態	備考	**合計**	針状	棒状	板状	その他	**合計**	台石	叩石	砥石	磨石	その他
No.１	―	―	―	―	**―**					**15**	2	5	2	1	5
No.２	竪穴建物跡	１棟	隅丸方形 一辺約4.5m	壁際土坑 建替えあり	**23**	3	1		19	**10**		6	3	1	
No.５	―	―	―	―	**―**					**1**				1	
No.６	竪穴建物跡	１棟	円形 直径約9.6m	建替えあり	**1**				1	**1**				1	
No.７	竪穴建物跡	１棟	円形 炉跡４基	建替えあり	**4**			4		**7**		5		2	
No.９	竪穴建物跡	１棟	円形		**29**	7	1	1	20	**8**		5	1	1	1
	溝状遺構	１条													
No.１０	―	―	―	―	**―**					**―**					
合計					**57**	10	2	5	40	**42**	2	21	6	7	6

学識者コメント

別紙のとおり。

※各学識経験者のコメントに対する質問については、以下のとおりご対応いただけます。

村上恭通（愛媛大学 東アジア古代鉄文化研究センター長）

下記メールアドレスにご連絡いただき、電話等での対応可能な時間帯などを調整お願いします。

E-mail： murakami00321@yahoo.co.jp

森岡秀人（奈良県立橿原考古学研究所 共同研究員）

コメントに対する質問には、ご自宅又は芦屋市教育委員会 三条整理事務所でご対応いただけます。

TEL.0797-23-1175（芦屋市教育委員会 三条整理事務所）

TEL.0797-23-6674（自宅）

舟木遺跡コメント

① 弥生時代後期後半から末（庄内期）の大型の竪穴建物跡４棟を検出し、多数の鉄製品が出土している。今回の調査面積が狭小であることを考えれば、五斗長垣内遺跡をしのぐ鉄製品を有する可能性がある。

② 出土した鉄製品には鉄器生産（鍛冶）に関連するものと工具類とに分けられる。後者には針状鉄器など、小型の工具類が多く、検出した建物跡にはそれらを使用した何らかの生産工房である可能性が高い。今回の調査範囲には、鉄器生産工房とその他の手工業生産工房からなる大規模な工房群が存在する可能性がある。

③ 今回の調査範囲で検出した工房群のほかにも、谷部を取り巻く尾根上には当時の土地開発の痕跡や数多くの建物群が存在することを想定でき、それらが有機的な関係を持って広大な範囲に広がることが予想される。

④ №.９トレンチで検出した一括出土の土器群は、人工的な掘削でできた法面の裾に丁寧に置かれたかのようであり、投棄されたというものではない。その背後の尾根頂上部に展開する平場には工房群を見下ろす重要な遺構の存在を想定させる。

⑤ 島にありながら海から隔絶された内陸に位置するこの集落遺跡は、立地、構造ともに特異であり、海を見下ろす五斗長垣内遺跡とは全く異なる性格をもった遺跡であったと考えられる。

愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター長
村上恭通

舟木遺跡コメント

○トレンチ調査の確認結果としては，面積に比し効果的な最大限のよい調査成果だと考える。鉄器に特化した工房群としては，竪穴の形態・大きさ，付属施設の面で蓋然性の高いものであり，淡路島のみならず，近畿地方でも邪馬台国活動期を含めて最大クラスの遺跡とみられる。

○舟木遺跡群はこの時期では島内最大の集住性があることが確実といえ，群とみなすことによって，立地や生産基盤を異にする大和・河内・摂津の巨大遺跡群に匹敵する歴史的評価を与えることが可能となる。当該期では近畿屈指の鉄工房遺跡群であり，北淡路が近畿中央部の集落遺跡とも連動する中，鉄器の製作や保有で有力視されることが従前のこの 10 年の成果を踏まえて立証された。

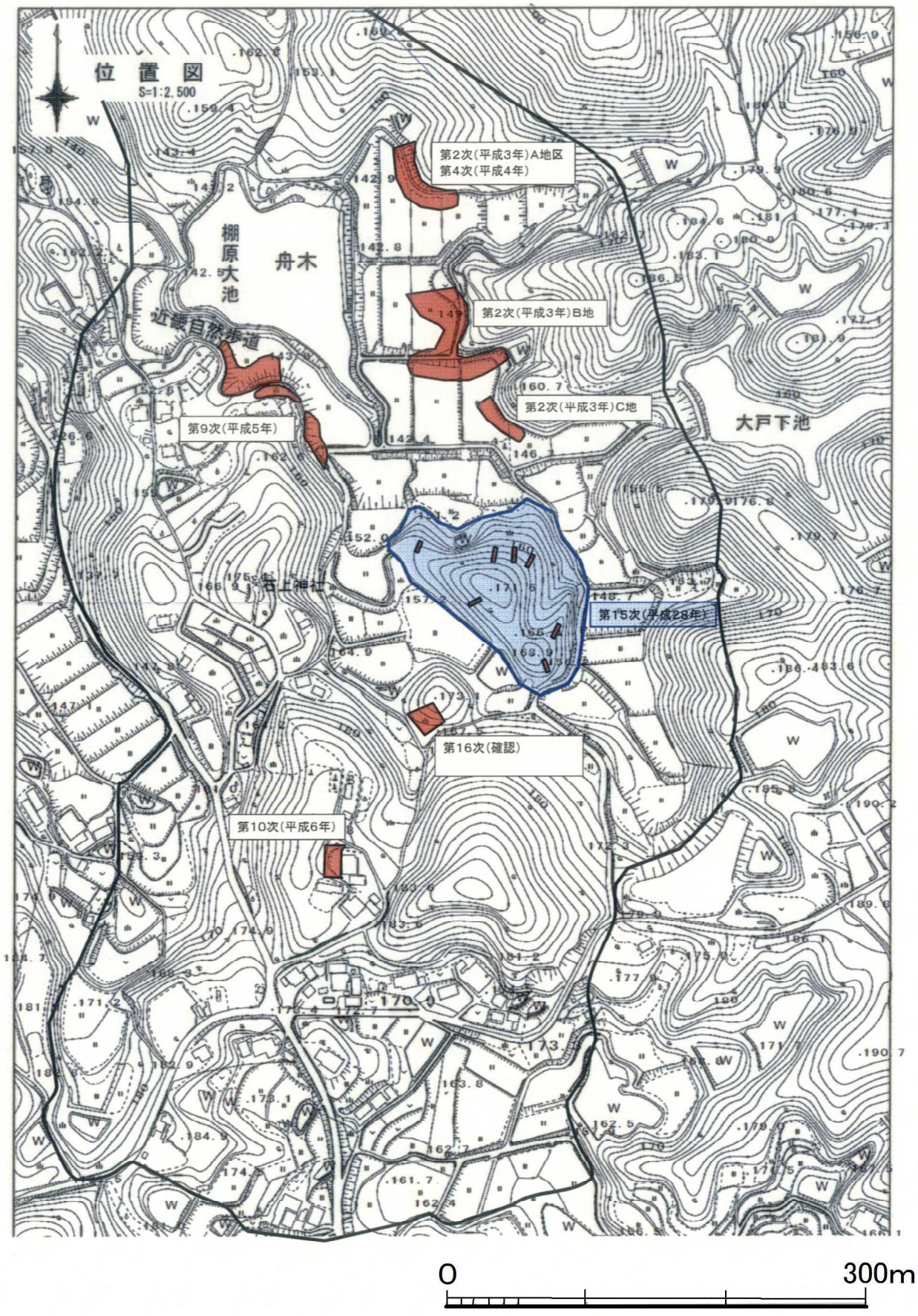
○中国鏡の早期保有などこの遺跡が周囲の広がり全体を通して，金属器文化の中枢を担い始めたようすがはっきりしてきた。今後の調査に大変期待が寄せられる。また，その中枢には鉢巻的な断続的な環壕もあるようで，大量の祭祀土器などが出土している。丘陵の上部分には金属器工房，鉄器工房とも深く関わる政治的施設や祭祀棟などが発見される可能性も高い。

○銅鐸のマツリに始まった淡路の先駆的な社会動向が南部から北部へと躍動的に変化していく状況も把握され，ヤマトの王権がどの段階からこの島に関与をみせ始めたかについて，考えるべき新たな課題が噴出してきた。

○淡路島北部は近畿中心部に向けての弥生後期の鉄器導入に中継地として大きな役割を果たしてきたと述べてきたが，このたびの調査成果はさらに中継拠点としての地域特性を複数の遺跡が持続的に担っていることを明らかにした点で画期的である。遺跡全体の性格が今後の調査により一段と高まる可能性大である。

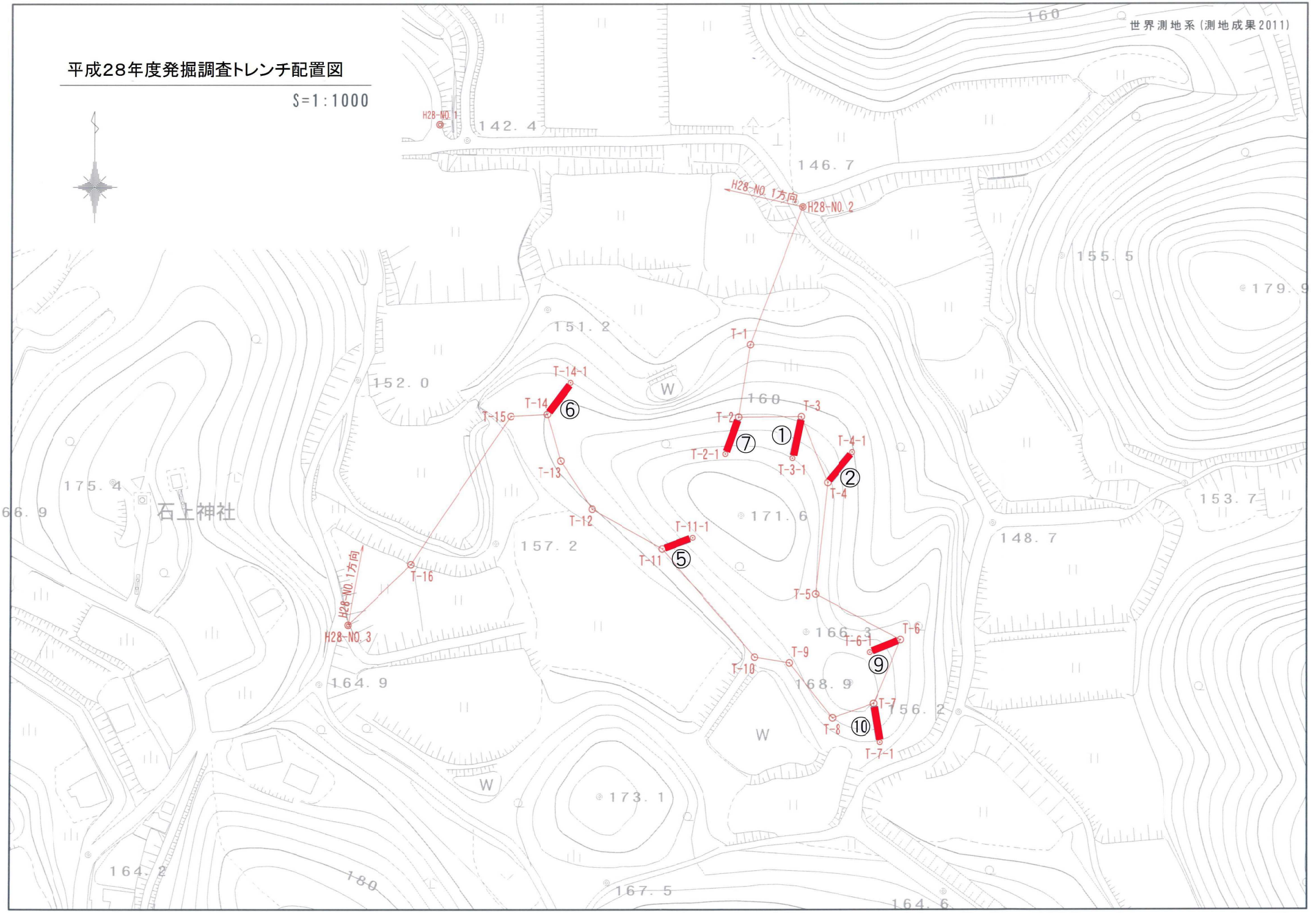
奈良県立橿原考古学研究所　共同研究員
森岡秀人

北淡震災記念公園セミナーハウス 及び 舟木遺跡位置図


位置図
S=1:2,500
第2次(平成3年)A地区
第4次(平成4年)
第2次(平成3年)B地
第2次(平成3年)C地
第9次(平成5年)
第15次(平成28年)
第16次(確認)
第10次(平成6年)
棚原大池
舟木
大戸下池
近畿自然歩道
石上神社
0
300m

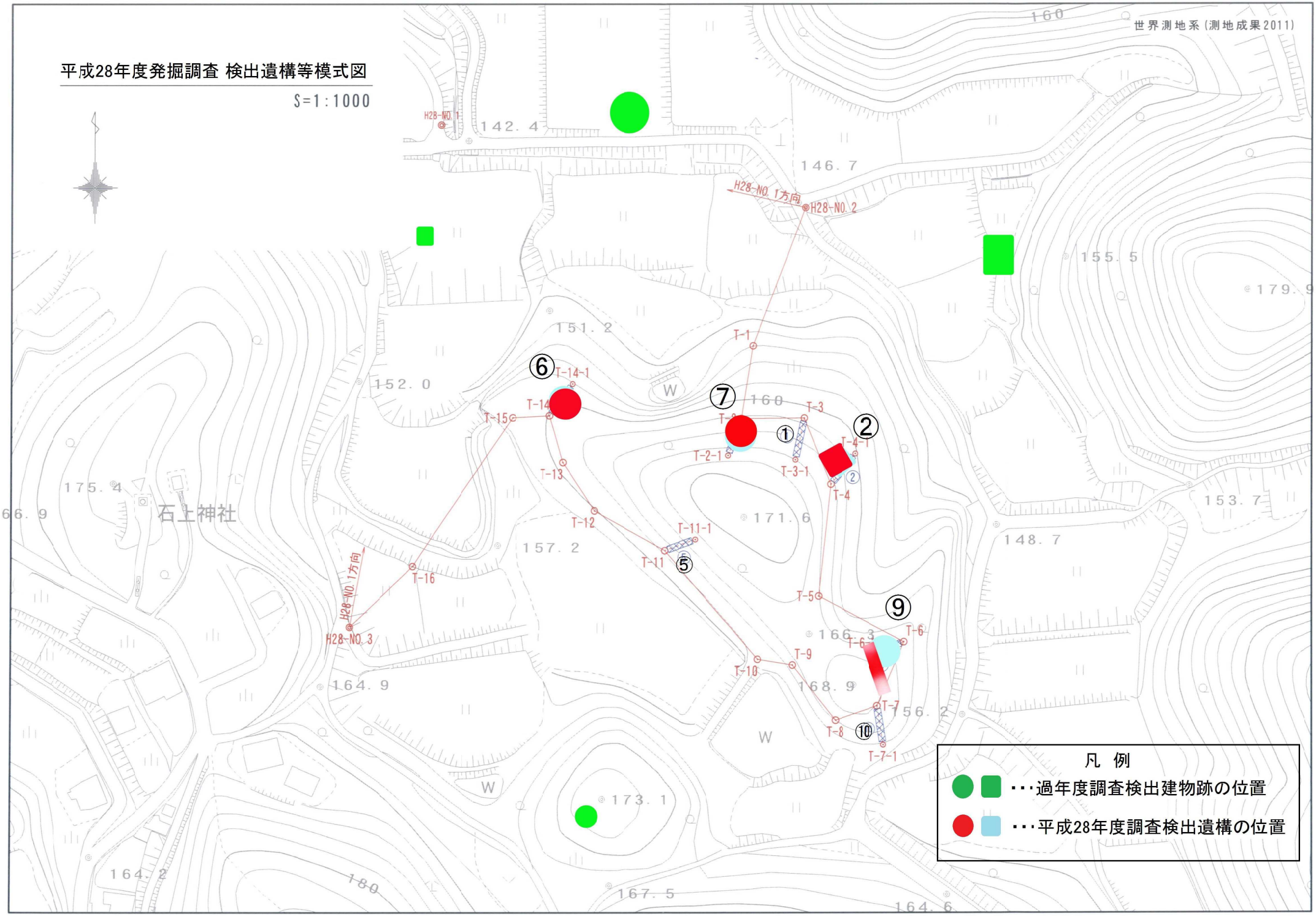
平成28年度発掘調査トレンチ配置図

S=1:1000



平成28年度発掘調査 検出遺構等模式図

S=1:1000



平成 28 年度発掘調査エリア航空写真

平成 28 年度舟木遺跡出土鉄器

№.２トレンチ全景

№.２トレンチ壁際土坑

№.6 トレンチ

№.7 トレンチ

No.7 トレンチ焼土面（炉跡）

No.9

No.9 トレンチ

No.9 トレンチ土器出土状況

平成 29 年 1 月 24 日

各　位

淡路市教育委員会
社 会 教 育 課

舟木遺跡発掘調査成果報告会の実施について

調査成果報告会について、下記のとおり実施します。

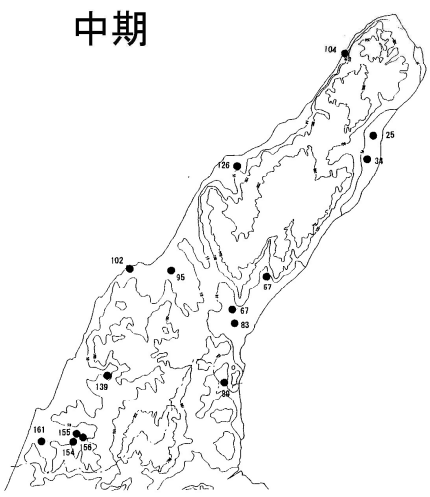
記

日　　時：平成 29 年 2 月 5 日（日）13：30～16：00
場　　所：北淡震災記念公園セミナーハウス（淡路市小倉 177）
　　TEL.0799-82-3400　FAX.0799-82-3401
内　　容：調査成果報告
　　出土遺物展示

【問合せ先】
淡路市教育委員会　事務局
社会教育課文化財係
担当　伊藤　長田　工藤　髙田
〒656-2292
兵庫県淡路市生穂新島8番地
TEL 0799-64-2520（直通）
FAX 0799-64-2566

淡路島北部における弥生遺跡の動向

中期



後期

終末期